



渋谷高等女学園

城島 真弓

生年月日 20XX年9月8日

2年B組



CONTENTS

第一章(入れ替わりレスセックス) P2～
「まだ、恋は知らない。そして永遠に分からない」

第二章(倒錯的入れ替わりおねショタ) P42～
「愛のある姉弟」

第三章(入れ替わりNTR) P81～
「そこは愛のあるマンション」

第四章(典型的入れ替わりセックス) P138～
「キモオタのブルース」

第五章(精神的入れ替わり近親相姦) P179～
「マユミ・アフター」

エピローグ(愛のある入れ替わりセックス) P231～
「狂ったままの世界」

第一章『まだ、恋は知らない。そして永遠に分からない』

城島マユミは優等生だった。加えてアイドルのように可愛らしい顔立ちをしている。おまけに家柄も育ちもいとあれば誰もが羨む人気者だった。

会社経営者の父と、絵本作家の母。東大大学院生の兄と、可愛らしい妹。

マユミは幸せだった。何不自由ない生活。良好な家族関係。

「それではお母様、行って参ります」

「ええ、気をつけてね。今夜はバイオリンの冨島先生がいらつしやいますからね」

いつものように母の見送りでマユミは学校へ行く。お抱えの運転手が操縦するのは黒塗りの車。

「中尾さん、カーステレオでフランス語の教材を流してくださいませんかしら」

「了解しました。マユミお嬢様」

「ありがとうございます。……あら、そうでした。中尾さん、たしか来週、お孫さんのお誕生日でしたよね。贈り物を用意しなくてはいけませんわね」

「お嬢様、まさか私の孫の誕生日まで覚えていてくださったのですか……？」

「もちろん。去年、嬉しそうに話してくれたではありませんの。覚えておりましたよ」

「なんとお優しい。……ありがとうございます。孫も大変喜ぶでしょう」

マユミほどに中身も外見もデキているような人間はそういない。もしこの世に『完璧』なんて言葉があるのだとしたら、マユミにこそ相応しい言葉だろう。

「それではお嬢様、お気をつけて行ってらっしゃいませ」

「ありがとうございます。行って参ります」

校門前にはマユミの乗ってきたものと合わせて何台もの高級車が並んでいる。この学校に通う生徒は寮生を除けばほとんどが送迎車で登校をする。生徒の安全も考えて学校側もそれを推奨しているくらいだ。

「ご機嫌よう。城島さん」

「あら、ご機嫌よう」

マユミは行き交う生徒たちと気さくに挨拶を交わす。それほど大人数の生徒が通っているわけではない。もちろん全員顔見知りだ。マユミは成績がいいことも、見た目がいいことも、にはかけない。他の生徒たちからの評判も当然すこぶるいい。

教室は二十人制で一学年に三クラス。通常の学校に比べて少人数だが、それが質のいい教育を保障している。

「それでは城島さん。ここの英文を訳してください」

「はい、先生」

マユミの通うここ渋谷高等女学園は都内でも有数の伝統ある女子高。ここに通うことができるのは皆、各界の有力者たちの御令嬢のみ。往年の有名俳優の娘。有名政治家の孫。某財閥の令嬢など。幼少期から英才教育を受け、学業と品位を併せ持つ本物の才女のみが入学を許される女の園。それがここ渋谷高等女学園なのだ。

ただひとり城島マユミはその中にあっても頭ひとつ飛び抜けて輝いていた。成績は常に学年でも五番以内。放課後は英会話クラブとテニス部の掛け持ち。家に帰ればバイオリンと生花の稽古。

それがマユミの人生だった。

ミスはなく、派手なことはせず、それでも人々を惹きつける。まるで花のような少女だった。周囲も羨みこそはすれど誰も彼女を嫌いになることなどできなかった。

放課後、マユミは生徒会室にいた。

マユミは一年生の秋から書記として生徒会に所属していた。このままいけば今年の秋、新しい生徒会長に就任するのはマユミで間違いないと誰もが思っていた。

部屋には他に会計係の一年生、塩乃木キョウコ。まだ入会したばかりの新人がいた。

カリカリとペンが机を叩く音。先週行われた会議の議事録をまとめて教師に提出するのが書記としての仕事だった。面倒な仕事だがマユミは手を抜かなかつた。生まれてからこれまで何にも手を抜いたことなどなかった。

吹奏楽部の演奏する楽器の音が聞こえる。テニス部がボールを打つ音も届く。

「あのおう、城島先輩、お尋ねしてもよろしいですか？」
沈黙を破ったのはキョウコだった。

老舗製菓メーカー会長の孫であるキョウコの喋り方はまさに育ちのいいお嬢さまといった雰囲気だ。

「何かしら。塩乃木さん？」

「こんなこと、お尋ねするのは大変失礼かもしれないのですが」

「……？ いいのよ、何でも訊いて」

「はい……、その……先輩は恋をしたことがございまして？」

「……恋？」

珍しくマユミの目が丸くなった。

「どうしたの、急に……何かあったの？」

「実はわたくし……殿方に愛の告白をされましたの」

「あら……」

マユミはどう返事したらいいか迷った。この学校においてこの手の話題はとても珍しい類のものだったからだ。女子校、それも箱入り娘たちが揃った名門校ともなれば、異性とのそういったアレコレを経験している生徒はあまりいない。異性間交友についての話題は隠すもの。人に話すことでは、少なくとも、この学校ではなかった。

「お相手はどちらの方なの？」

「父のお知り合いのお医者様の息子様です。大学二年生とおっしゃっておりました。これまでも何度かお会いしたことはあったのですけれど。先週末のパーティーで『結婚を前提に交際してほしい』と。わたくし、あまりのことに驚いてしまって。……まるで逃げ出すように自分の部屋に戻ってしまいましたの」

「……嫌だったの？」

キョウコは首を振った。

「そんなことありませんのよ……。とても、魅力的な殿方だと思いましたわ。だからこそ、わたくしどうしたらいいか分からなくて……。だってわたくしは殿方と交際なんてしたことないんですもの。だから思わず……。その場から……。でも失敗でした。わたくしはあの方を傷つけてしまったのではないかと、ずっと、それだけが気になってしまって……」

その肩が震え出した。鼻をすする音。キョウコの美しい顔が見る見るうちに涙に濡れる。
ああ、これが……。

これが恋なのか、とマユミは思った。

他人から言われた一言に心を悩ませ、自身のなんて事のない行動に一憂する。そんな不合理的な感情。不思議だ。マユミには理解はできても、感じたことのない種類の感情だった。

「……私も分かるわ。その気持ち」

マユミはキョウコの涙をハンカチーフで拭いた。それは半分嘘で、半分は本当だった。

「私もね、昔憧れていた殿方がいましたのよ。多分、きっとあれが恋心というものだったのだと、今では思えますの」

「先輩も……恋を？」

「ええ、たった五歳の時の話ですけどね」

マユミが笑うと、キョウコもくすりと笑った。マユミからハンカチーフを受け取って眼尻を拭う。

子供の頃の初恋とも呼べないような初恋を除けばマユミは恋らしい恋をしたことは、まだない。もちろんどれだけ優等生だとしても、そういった色ごとに興味がない……わけではない。

恋に懂れることはだつてある。

あの真面目な後輩の心を狂わせるほどの素敵な気持ちがこの世に存在するというならば、たとえ恋が罪悪だとしてもそれを一息に飲み込むことも良いと思え。愛する人と結ばれ、いつかは真っ白なドレスを着て教会で式を挙げたい。そんな漠然とした妄想をすることだつてないわけではないのだから。

しかし、それはシンデレラに懂れるようなもの。どこか別の世界のお話。真実の愛のキスを交わした男女が永遠に結ばれる。そんなおとぎ話。

私はいつかお父様が認めた方の元に嫁ぐのだろう。そのために自分を磨き続ける。どこへ行っても恥ずかしくないように。城島家のものとして輝き続ける。

それがマユミにとっての人生だった。

だから、マユミはまだ恋を知らなかった。

「でも安心したわ。塩乃木さん、生徒会室に来てからなんだかずつと顔色が悪かったんですもの。どこか具合でも悪いんじゃないかって、ちよつとだけ心配してたのよ」

「……ごめんさい」

「さあ、顔を洗ってきなさいな。素敵なお顔が台無しよ」

「はい……先輩、ありがとうございます」

キョウコがハンカチーフを握り締めながら、まだ少し赤ばんだ顔で生徒会室を出て行く。足音が遠ざかってマユミは小さくため息をついた。キョウコの涙を見たら、なんだか自分まで悲しい気持ちになってしまった。

「……恋、ねえ」

マユミはかつての初恋を思い出していた。

それはピアノの先生だった。子供の頃の音楽の家庭教師の先生。

まだマユミは五歳だったから、あの時、先生が何歳だったのかもよくわからない。顔だってもうおぼろげにしか思い出せない。ただ背が高く顔が細長い人だったのは覚えてる。顔に似合わない低い声と、銀縁の眼鏡。

『せんせいのおゆび、とてもキレイ』

とマユミが言うと、困ったような顔をしながらクシャツと笑った。

マユミは先生の綺麗な指に恋をした。鍵盤の上を泳ぐように動くその十本の指。今でも時々夢を見る。魔法使いのようだと思った。指を動かすだけで素敵な音を奏でることができる。その手に触れたい。

もし、あの感情の名前を恋と呼ぶのなら、もう一度くらいはそれを味わってもいいかもしれないと思った。

「あら、私……なんてことを考えているのかしら」

イケナイ、イケナイ。

「はしたない事を考えてしまったわ。だめね」

男性の手に触れてみたいなんて。それはイケナイ気持ちだ。結婚までは貞操を守る。嫁ぐべき人のところに嫁ぐ。

そんなイヤらしい事を考えてしまうなんて……勉強や仕事に身が入っていない証拠だ。

マユミは気を入れ直す。ペンを持つ手に意識を戻して、再び議事録を見つめ直した。

と、その時。

◇ ◇ ◇

それはこの後『入れ替わりパンデミック』と名付けられる現象だった。

世界中で同時多発的に起きたその奇妙な現象の原因はいまをもって不明だ。

ただ事実として分かっていることは、その瞬間、世界の人口のおよそ六割の人間の精神が肉体から引き剥がされてしまった。そして別の位置に存在している肉体、もともとは別の意識が宿っていた肉体に転移する。精神の「入れ替わり」と呼ばれる現象が発生した、というそ

れだけ。

城島マユミの精神はこの瞬間、十七年間宿っていた肉体から離された。

絹のように美しい髪。白く美しい肌。ほどよく膨らんだ乳房と引き締まった腰。

城島マユミの精神は別の肉体へと移動した。

そして、マユミの肉体には、別の精神が入り込む――。

◇ ◇ ◇

それはほんの数秒だった。

マユミの手からコロンとボールペンが滑り落ちた。静かな生徒会室にボールペンが床に落ちる音が響いた。

先ほどまで聞こえていた吹奏楽部の演奏もなぜか大きく乱れ、やがて聞こえなくなった。

マユミはキョロキョロと辺りを見回す。

もうかれこれ一時間はこもりきりの生徒会室、まるで初めて見たかのような不思議そうな

顔をしている。

「あれ、ここどこー？」

マユミは間伸びした口調で言った。それは先ほどまでのマユミの口調とはまるで雰囲気が違っていた。マユミはべたべたと自分の顔を触る。頬を撫でる長い髪。

「なにこれ？ 急に髪が伸びたあ？」

マユミは自分の髪を引っ張る。

これは夢ではないのだ。当然それはマユミの頭皮につながっている正真正銘の髪の毛。勢いよく肌を引っ張られ、リアルな痛みがマユミの身体に伝わる。

「い、痛たたた」マユミが涙目になる。「なにこれ。なにこれえ」

マユミは椅子をひっくり返すような勢いで立ち上がった。そのせいでスカートの裾が捲り上がる。真っ白な下着が顔を出す。恥じらいのない姿を気にもせずにマユミは手足をバタバタとさせる。

「ママ、ママあー！」

マユミは半べそをかきながら大声で叫ぶ。ここは学校だ。もちろん返事なんてありはしない。マユミの母親はきつと家で仕事をしているはずなのだから。

「ふえーん、ここ、どこー」

とうとうマユミは泣き出した。

先ほどのキョウコの泣き姿とはまるで違う。ワンワンと声を上げて泣いている。まるで子どものような泣き様。

「ママー、パパー、どこー、怖いよお！」

ボロボロと大粒の涙を流しているマユミ。

普段の彼女の姿を知っている者が見たら、きつと仰天するだろう姿。下着は丸見え、人目もはばからずに涙を流し、鼻水も垂れている。駄々を捏ねるように手足をばたつかせるたびにその胸は激しく上下している。

「ふえ？」

その時、偶然マユミの手が自分の胸に触れた。大きすぎるわけでもなく小さすぎるわけでもないサイズの乳房。それを包むレースのブラジャーは一枚二万円の高級品。泣き顔のマユミはゆっくりと視線を下にずらす。そこには制服を持ち上げる乳房。マユミの瞳は自分の胸の膨らみを感じと見つめた。

「……おっぱい？」

綺麗な声でマユミは言った

もちろんマユミの身体には何年も前から「おっぱい」と呼べるだけの胸の膨らみがついて

いる。まるで初めてその膨らみに気がついたような声色を出すのはとても不自然だ。

「ボク……ボクの身体に、おっぱいがついてる！」

マユミは自分の胸を揉みしだく。はじめての触れるかのように、不思議そうにモミモミと手を動かしている。鼻水を垂らしながら自分の胸を揉む美少女。

新しいおもちゃを手にした子どものように、ぽよんぽよん、と乳を揺らす。

楽しい。揺らすたびに感じるほのかな痛みと振動がほんわか気持ちいい。おっぱいに触るのも気持ちいい。触る気持ちよさと触られる気持ちよさと。

「……!?!」

と、何かに気がついた。

マユミは恐る恐るといった具合に、ゆっくりとその細くて美しい手を、自分の股のところへ運んだ。純白のパンティ。汚れひとつない。その表面は当然に女性らしくなだらか。マユミはそのなだらかな股間をひとしきり撫でてから、信じられないといった表情で呟く。

「ボクのおちんちんがない……!?!」

マユミは生物学上の「女性」にあたる。生まれながらの女だ。当然その身体に「おちんちん」がついていたことはない。にも関わらず、マユミは自分の股に男性器がないことを本気で驚

いている。

「ああ、どうしよう！ ママッ、ママアー!! どうしよ！ おちんちんが……とれちゃったあ！ ボクのおちんちんがどつかへいつちやつたよお!!」

マユミは思わずべたりとその場に座り込む。するとますますその股は女性そのものだとはつきりと分かる。そこにあるのは間違いない。「おちんちん」ではなく「おまんこ」だ。突起はなく、割れ目、純潔を保証する処女膜のあるメスの証「おまんこ」。

床に座り込んだマユミは泣き崩れて、身体を床に投げ出す。もはや髪の毛もスカートも何もかもがめちやくちやのまま泣きじやくる美少女。その姿は駄々をこねる子どもそのもの。

◇ ◇ ◇

『入れ替わりパンデミック』によって、城島マユミの肉体の新たな持ち主となったのは、川尻ユウトという少年の精神であった。

郊外の中流家庭出身の精神。

父親が三十年もののローンを組んで購入した2LDKの一室で、電車のオモチャのレールをつなげて遊ぶのが大好きな少年だった。

来週には誕生日を迎える予定だったユウトは、プレゼントにレゴブロックをお願いしていた。しかし、ユウトの精神がそのレゴブロックで遊ぶことはこの後、一生なかった。

『入れ替わりパンデミック』発生後、緊急閣議決定によって制定された『入れ替わり新法』によって、個人の権利は肉体に準拠すると定められた。

個人の識別は全く肉体によって行われるべし。

それが新しい世界の原則だった。

ユウトの肉体を持つものがユウトであり、マユミの肉体を持つものがマユミだ。

富も名誉も、罪も負債も、名前さえも。

『パンデミック』以降の世界でも引き続き、それはその肉体が持つべき財産と決められた。

つまりこの後、ユウトの精神は生涯城島家のマユミという女性として扱われることになった。

ユウトの誕生日プレゼントとして購入されたレゴブロック。それはユウトの肉体を得た、城島マユミの精神の所有物となった。

◇ ◇ ◇

「うう、うう……………」

泣き疲れるほどに泣いたマユミ。急にその身体に尿意を覚えた。それは、ユウトの精神がはじめて感じる女性としての尿意だった。

「おしっこ……………したいよお」

マユミはゆっくり立ち上がった。生徒会室には一つしか扉はない。迷う心配はなかった。しかし、そこは知らない領域。子どもにとって知らない世界は常に怖いものである。恐怖を感じる。だが、肉体の発する尿意にも逆らえない。おもらしをしたらママからこっぴどく怒られると、その恐怖もあった。

覚悟を決めた。マユミはトイレを探すために恐怖を押し殺して扉を開けた。

そこはマユミにとっては何百回と通った廊下だった。しかしユウトの精神はそこを知らなかった。長く続く廊下。そこは第二校舎の最上階だった。生徒会室やその他部室が揃った階。

放課後は書道部や美術部など文化系の生徒たちが集まっているはずだった。

「おい、お前、おまんこ見せるよ」

「ああ、いいぜ。交換な。俺はお前にこの身体のおまんこ見せるから、お前は俺にそのおまんこ見せるよな」

生徒徒たちが互いにパンティをずりおろし互いの股間を覗き込んでいた。

マユミの精神であればそれはおかしい光景だと即座に理解しただろうが、ユウトの精神にはそれができなかった。

廊下には半裸の女生徒たちが集まっていた。お互いの身体を観察したり、自分の股を覗き込んだりしている女生徒。

「おい、おまえ！俺はちゃんと舐めてやってんだから、おまえも俺のおまんこしつかり舐めろ！」

「あん!! ああ、女の子の身体気持ちいい！三十年以上童貞だった僕がこんな歳下の女の子の身体になれるなんて、サイコー！」

彼女たちはそんなことを大声で叫びながら互いの股間にむしゃぶりついている。それはマユミにとって同学年の二人、当然顔見知りのはずだが、今のマユミは二人のことを知らない。

「笹原さん！ どうしてしまったの！ そんな……はしたないこと」

「ああん？ お前、この身体の知り合いか？ ははは、せっかく女の身体になったんだ。すぐもどつちまうかも知れねえだろ？ 今のうちに女のオナニーしとかないと損だろ？ あ、それとも俺たちもあつちの奴らみたいにレズるか？ そうだ、そうしよう」

「レズ、る……？ キヤアッ！ なにをなさるの、おやめなさって！」

「はは『おやめなさって』だって。可愛いねえ」

強引に女子生徒を押し倒している少女の姿もあった。

いまのマユミの頭には目の前の光景を処理するだけの情報とキャパシティがなかった。何が起こっているの理解ができなかった。ただ意味不明の行為が繰り返られている状況にますます恐怖心が膨らむだけ。

尿意が強くなる。

マユミは他の女生徒たちの合間を小走りで抜ける。トイレは簡単に見つかった。が、どうにも女子トイレしか見つからなかった。

ここは女子校なのだから教員用のトイレを除けば、当然男子用のトイレなど必要ないのだ。「トイレ……トイレどこお？」

しかし、いくら探しても青い壁のトイレはない。

マユミは仕方なく最初に見つけたトイレに入ることにした。それは以前テレビで「緊急時なら別の性別用のトイレに入っても法律的にはオーケー」とあったのを思い出したからだ。

マユミの膀胱はもうパンパンだった。一分一秒の猶予もなさそうだった。

しかし、トイレに駆け込んだマユミはさらに驚いた。

小便器がない！

女子トイレには小便器なんて必要ないのだという知識が今のマユミにはなかった。ズボン

のチャックからホースを取り出して小便器に向かって放つのがおしっこだと、今のマユミの中ではそれが「常識」だった。

「あ……あ……あ……あ……」

それは誤算だった。

マユミの身体は比較的尿道が短い。比較的、というのはユウト、つまり男子の身体と比較してのことだ。女性の身体は男性と比べて尿意を我慢しづらいのだ。

「ああ……あ！」

結果としてマユミはお漏らしをしてしまった。

あと少しで間に合うというところで、目の前にはトイレの個室があるというのに、トイレの床に思いつきり小便を垂れ流してしまった。

じよわり、と。

スカートの中から溢れる尿。

物心ついてからマユミが人前で粗相をすることなどなかったのに。

「おしっこ……とまらないよお」

それは初めての経験だった。おしっこといえばおちんちんの先から出すものなのに、マユミの身体はなんだかよくわからないところからおしっこを出す。

女の子の身体になってしまった。

と、ユウトの精神は否応なしにそれを自覚することになった。

マユミの身体は膀胱に溜めていた尿をすべて放出した。その尿はまだマユミの肉体に以前の魂が入っていた頃に溜めていた分の尿だ。これからその膀胱が溜める尿は、新しい精神が食べたもの、飲んだものから作り出した尿。これからその尿道が垂れ流すのは新しい主人の意思で放つ尿なのだ。

「……どうしよう、ええん、……どうしよう。ママに怒られちゃう……よお」

下着も、スカートも、もう尿でびしょびしょになってしまった。気持ち悪い。ぐしよぐしよする。今すぐ着替えたい。とマユミは思うが、女物の服の脱ぎ方すら知らない。

「ははは、おいおい、実にいいものを見せてもらっちゃったなあ」

どうしたらいいのか分からず、また泣き出そうとしていたマユミの耳に入ったのはそんな声だった。

涙のたまる目で声の方を見るとそこには半裸の少女が立っていた。

「オマエ、名前はなんていうんだ？」

「ぐすん……、ユウト」

マユミは自分のことを『ユウト』と名乗る。

ニヤニヤとマユミを見下ろす少女はそれを嬉しそうに聞いた。
「ふうん、男のガキか。はは、こりゃあ楽しめそうだな」

少女はその姿に似合わない中年男性のような口調をしている。

◇ ◇ ◇

その少女は塩乃木キョウコといった。

この春にこの学園に入学してきたばかり。それでいて城島マユミも所属する生徒会の新入りメンバーでもあった。

キョウコはマユミに言われてトイレで顔を洗っていた。交際を迫られた男性を傷つけてしまったかもしれないという不安から溢れでてくる涙が汚した顔だった。

キョウコはマユミに相談してよかったと思った。

本当は何一つ解決していなくても話すことで気持ちが悪くなるということもあるものだ。頼れるものは先輩だと思った。

次、「あの人」に会えたなら自分の方から交際を申し込もうと思った。お父様のお得意様の息子だ。お父様もきつと反対しないだろうと思った。

もし交際がうまくいったなら大学を出てすぐに結婚したい。子どもは四人欲しいな。お父様の会社で働きながら子育て。うん、大変だけど、できるかな？ とそんなことまで考えていた。

将来への希望がムクムクと湧いてきた。

その時だった。『入れ替わりパンデミック』は起こった。

キョウコの精神は十六年間共にあつた肉体を離れた。そして、九州の地方都市に住む四十年代男性の肉体が、キョウコの精神にとつての新しい身体となつた。

入れ替わつた男の名は田中カズヒコといった。カズヒコは高校卒業後、二十五年近くその地方都市にある工場の作業員として従事していた。

ひとりで生きていくのには贅沢さえしなければ充分に生きていけるだけの給金が貰えた。彼にとつての数少ない趣味がパチンコと競艇だった。

休日にはもっぱらポートルート場で缶ビールを飲みながら賭け事に興じていた。タバコもばかすかと吸つた。

その身体はまだ四十代の半ばだったが、長年の不摂生がたたり、肝臓の数値も悪く、肺は真

っ黒だった。

女にはモテなかったが、女などいらぬ。風俗さえあればいいと思った。給料日に行くワンセット五千円のピンサロがカズヒコの楽しみだった。いつも指名するのはルカという歯並びの悪いピンサロ嬢。女子大生と言っていたが少なくとも五歳は鯖を呼んでいるだろうというのがカズヒコの見立てだった。

ルカにフェラチオさせていると、時折将来のことが不安になった。このままでいいのかとそんな風に思ってしまうこともよくあった。

酒にタバコにギャンブル、風俗。

贅沢しなければ貯まっていたはずの金も、そのせいで貯まらなかった。

ああ、どこで人生を間違えてしまったんだろうか。夢も希望もなく、気がついたらこんな歳になっちゃってしまっていた。

可愛い女の子に生まれ変わりをえ。みんなに愛されるような可愛い女の子になって、幸せに生きてみたい。妄想が膨らむ中で、ルカのフェラチオで射精する。射精の満足感を上回る、不安感。カズヒコがピンサロから帰る足取りはいつもどこか重たかった。

『パンデミック』が起きた時、カズヒコの銀行口座にあったのは四千円余りの貯金だけだった。

そしてその四千円は『入れ替わり新法』によって、新しくカズヒコとなった、キョウコの精神の財産となる。

◇ ◇ ◇

トイレの床に粗相をしたマユミを見下ろすキョウコ。その表情はイヤらしく歪んでいる。

「お漏らししちゃったのか、可哀想に。俺が……いや、コホン、あたしが、助けてあげるわね」

「……ホント？」

「ああ、本当さ。だから俺……あたしのいうことをちゃんと聞くのよーん」

「……うん」

こくりと頷くマユミ。それを嬉しそうに眺めるキョウコ。生徒会においてはマユミが先輩で、キョウコが後輩のはずなのに。その様子は全く感じられない。

よく見るとキョウコはスカートも履いておらず、下はショーツ一枚、上は前のボタンを留めていないワイシャツ姿とおかしな格好だ。

それというのもマユミがトイレに飛び込んでくるまで、キョウコはトイレの個室でオナニーをしていたからだ。『バンデミック』前まではキョウコは学校のトイレで自慰行為をするよ

うな少女ではなかったが、これより後、キョウコはこの学園を卒業するまでの間、何度もこの個室にこもっては自分の性をいじるようになる。

「ほら、あたしがお洋服を脱がしてあげるからね」

キョウコはマユミの服を一枚一枚脱がしていく。マユミは自分ではスカートのファスナーを下ろすことも、ブラジャーのホックを外すことも出来なかったのだ。あつという間にそのトイレには裸の美少女が現れた。

生徒会書記で優等生の城島マユミの裸。

マユミは自分の身体を見下ろした。

「ああ……やっぱり、おちんちんがない……」

膨らんだ胸。その先にはピンク色の乳首。胸の谷間をどけて股間を見ればそこには薄い毛があるばかりで、当たり前だがペニスなどあるはずもなかった。マユミ——ユウトの精神がはじめて見た、母親以外の女の身体。

「ほお、こいつはすげえ、お前、いい身体してるじゃねえかよ。普段の俺ならJKの服を脱がすなんて即逮捕ものだろうが、今は俺だつて現役JK。犯罪じゃあねえよな」

キョウコはマユミから剥ぎ取った制服を繁々と眺めてから、鼻を埋めた。若い女のいい香りとちよつとだけ小便の臭いがする。

マユミはそんなキョウコにモジモジという。

「……ボクのあたらしい着替えは？」

「着替え？ ああ、ほら。これなら濡れてないぜ」

キョウコは綺麗なスカートをマユミに向かって放り投げる。それはキョウコのスカート。

「ボクは男だよ。スカートなんて履けないよ！」

マユミの抗議を、キョウコは鼻で笑う。

「ふうん、そうなんだあ、男の子なら裸でも平気だよねえ。恥ずかしくないはずでしょう？」

「……うう。でもお」

マユミは隠すように身体を縮めた。両の腕だけでは胸と股間の両方は隠せない。

本当に男であるならば股間はともかく胸など隠す必要はないはずだ。マユミは胸を隠そうとする。そこには確かにおっぱいがあるからだ。であるならばそれはマユミが男なはずはない、何よりの証拠。

「……恥ずかしいよお」

顔を赤らめていまにも泣きそうな顔のマユミ。しかも全裸。

なんと男の支配欲を刺激するような光景だろうか。とうのマユミにはそんな事理解もできない。

「いいねえ。最高だよウトくん」

「何がサイコーなの？」

「その恥じらう姿が最高に可愛いつて、そう言ったの」

一方のキョウコはマユミの姿に性的な興奮を覚えた。

目の前のメスを犯したいとそう思った。ペニスを勃起させ、目の前のメスに挿入し、膣^{なか}内で射精し孕ませてみたいと。それは実に男性的な欲求だ。その興奮はペニスを勃起させるような命令をキョウコの肉体に発するが、そこにペニスは無い。

代替手段としてキョウコの肉体に備え付けられている女性器が充血する。愛液を分泌させる。子宮がきゅつと下りてくる。

「ああ、畜生。今すぐシコリてえ！ 目の前の最高にエロエロなJKおまんこをオカズにセズリこきてえよお！」

キョウコの両親が聞いたら卒倒しかねないような下品なセリフを彼女は口にす。

キョウコはマユミの身体に飛びついた。

「ユウトくうーん、俺が……あたしがね、お姉さんがね、ユウトくんがいいこと教えてあげるわよおーん」

「いいこと？」

「そ、とつてもとつても気持ちいいこと」

キョウコは後ろからマユミに抱きついた。マユミの背中にキョウコのおっぱいが押し当てられる。マユミはドキドキした。おっぱいの感触を背中いっぱい感じる。

「ユウトくんは、オナニー、つてしたことある？」

「……オナニー？」

「ふふ、したことないんだ。じゃあ男の子の気持ちよさを知る前に女の子の気持ちよさを知っちゃうんだね」

「……？」

「オナニーってのはね、とつても気持ちいいことなんだよ」

キョウコは後ろからマユミのおっぱいに手を回した。そしてそっと乳首を撫でる。

はじめキョウコが自分に何をしているのか、マユミには分からなかった。しかし、だんだんとキョウコが触る部分から電流に似た気持ちよさが広がってくるのに気がついた。

それに気がつく頃には自然とマユミはその身体をくねくねとよじらせていた。

「……な、なに……これ」

「へへ、気持ちいいか？」

「……………うん。なんだか……………気持ち……………いい」

マユミの声はいつの間にかメスの色に染まっていた。

ぶつくりと乳首が勃起していく。触ってくれと主張するように乳房が震える。キョウコの手にはとても収まらないサイズ感。

後輩の女子に乳を揉まれる。昨日までのマユミは想像すらしなかっただろう。というよりもそんな想像ができるほどの性に関する情報もなかったかもしれない。

「ね……………ねえ、お姉さん。なんだかボク。なんだろう。お股が変だよ」

マユミは今まで感じたことのない感覚を味わっていた。それは勃起とは違っていた。

ユウトの身体はつい数ヶ月前に勃起を覚えたばかりだった。スイミングスクールの途中、急におちんちんが大きくなって驚いた覚えがある。その現象を勃起と呼ぶのだと教えてくれたのはクラスメイトだった。ただその勃起がどうしてなんのために起きる現象なのかは知らなかった。

あの頃から時折勝手におちんちんが大きくなることがあった。

でも今回のこれは違う。マユミの身体にはユウトと違っておちんちんはついていない。だからこれは勃起に似ているけど勃起じゃない、何か別の現象なのだろう。

お股からじんわり気持ちよさが広がっていく感覚。

「ははは、変じゃないんだよ。女の子はねえ、気持ち良くなるとこうなるのよ」

キョウコは後ろからマユミの股間を撫でた。

「きゃッ……！」

それは自然とマユミの口から出た言葉だった。マユミの目の前に差し出されのはキョウコの手。その手は透明な液体でピカピカしていた。

「これがユウトくんの出した液だよ」

「……え？……おしっこ？」

「違う、違う。これはね、愛液っていうんだよ」

「あい……えき？」

「そう、女の子の身体はね気持ちよくなるとこの愛液でおまんこをじっとり濡らしちゃうんだ」

言いながらキョウコはまたマユミのおまんこをいじった。こんどはそつとなんてものではなく、しつかりと触る。もうマユミは抵抗しなかった。触って欲しいとさえ思っていた。

未知のものに対する恐怖よりも、キュンキュンと疼くような気持ちよさの方が優った。

びちよびちよとマユミのおまんこから愛液が滴った。その度に言いよの無い快感がマユミを襲う。

「はあ、ん……はあ、はあ」

自然と喘ぎ声が漏れる。

その声を聞きながらマユミの後ろでキョウウコも確かに興奮していた。

「ああ、犯してえなあ！　なんでこの身体にはチンポが無いんだよ！　もしここに俺のちんぽがあったら、この濡れ濡れおまんこにぶち込んでやるのにさあ！」

キョウウコのおまんこも、もうマユミのものと同じようにびしょびしょだった。

「中身がガキでも関係ねえよな。身体は一級品だ。ああ、エロい。エロいなあ！」

キョウウコはマユミにキスした。深いキスだった。キョウウコはマユミの口の中に舌を無理やりねじ込んだ。マユミは訳もわからずにそれを受け入れた。マユミの身体にとっても、キョウウコの身体にとっても、キスは初体験だった。

むちゅうううううう。むちゅツ……、むちゅうううう！

キスは結婚式で愛した殿方とするものだと思っていた。特にキョウウコにとってそれはいつか「あの人」としたいファーストキスだった。

今のキョウウコには「あの人」との記憶などない。男と恋愛ごとをするつもりなどもうカケラもない。そんなことより目の前のメスを犯したい。その気持ちだけだった。

事故で手を失った人の中には、もう無いはずの手が痛みに痒くことがあるという。キョウ

コもいま同じような疼きを感じている。それは股間に。キョウウコの身体にはそんなものが付いていたことはないけれど、いま、キョウウコは自分の股間にあるペニスがギンギンと痛いほどに勃起している幻覚痛に苦しんでいる。

ああ、射精したい。ぶちまけたい。目の前のメスの身体を孕ませたい。

マユミとキョウウコの深いキス。唾液が溢れて床に溢れる。上品さのカケラもない。動物的な絡み。

「な、なにか……くる」

マユミが身体を震わせた。それは絶頂だとキョウウコは知っていた。だから手を休ませなかった。目の前の美少女が絶頂するのを見たいから。

「イケ……イケ……イっちゃえ！」

「んッ……んんッ……んんんんあ……！！」

びくんびくん、とマユミの身体は震えた。

びゅくく、とおまんこから小さく液体が飛び散った。マユミの喘ぎ声をキョウウコはキスで受け止めた。

「……………ツカ……………ア」

声も出せずにマユミは果てた。

女としての初めての絶頂。マユミは気絶するように後輩であるはずのキョウコの身体に身を委ねた。

「どう？ 気持ちよかった？」

キョウコが尋ねるが返事はない。マユミはただ恍惚の表情で股と口から透明な汁を垂れ流すだけだった。

「お返事もできないんだね。イケナイ子。でも大丈夫、これからあたしがいろんな大人の事をこの身体に教えてあげるから、ね」

キョウコはニヤニヤと笑いながら、マユミの乳房を掴んだ。
疲れ果てるまで、ふたりは延々と汗を流し絡み合い続けた。

◇ ◇ ◇

『入れ替わりパンデミック』の後、城島マユミの父の会社は解散となった。創業者である父も含め社員の八割強が『パンデミック』の被害者となったからだ。

マユミの父は行方不明だった。

正確に言えばその身体だけは見つかっているのだから『パンデミック新法』に則れば行方

不明ではない。

ただ父の身体は「ばぶばぶ」と言葉ともとれないような声を発しながら糞尿を垂れ流していた。どこかの乳児と入れ替わってしまったのだろうと結論づけられた。父の身体から情報を得られない以上、その精神を探すのは困難を極めた。

残った株主たちによって会社は解散。その資産は分配されることになった。

マユミの肉体はそれによって、慎ましく生活すれば一生は食うに困らない額の現金を手にするようになった。

しかし、今のマユミに金銭の管理は難しい問題であった。助けを乞おうにもマユミには頼れる人はいなかった。以前の身体だった時の両親もパンデミックに巻き込まれて行方知らずだった。ユウトの身体も見つからない。

そんなマユミを支えてくれたのは、塩乃木キョウコだった。

マユミも『パンデミック』の後、一番に「優しく」してくれたキョウコのことを信頼していた。その肉体はキョウコの方が歳下だったが、マユミはいつも彼女のことを「キョウコお姉ちゃん」と呼んだ。キョウコはマユミのことを「ユウトくん」と呼び続けた。周りが自分を「マユミ」と呼ぶ中で「ユウト」と呼んでくれるキョウコのことをマユミは好きだった。

優しいキョウコが、マユミの資産の管理を担ってくれた。

「一生、あたしが面倒を見てあげるからね」

キョウコの言葉はすごく安心できた。

マユミはキョウコのいうことにはすべて従った。

抱かせろと言われればキョウコに身体を委ねた。舐めろといわれればキョウコのおまんこを舐めた。難しいことを考えなくていい生活はすごく楽だった。

ひと月ほど経った頃の話だ。

キョウコとマユミの元に四十代半ばの男が現れた。

その男は自分こそがキョウコだと喚いて、とてもうるさかった。

キョウコはその男の目の前でマユミを抱いた。それはとても激しいセックスだった。お互いが上になり下になり、汗とよだれと愛液でシーツをびっしりに濡らしながら相手の身体を貪る、獣のような交尾だった。

男はひどく動揺し、ただ呆然とその光景を見つめながら、勃起していた。

「わ、わたくしの身体でそんなこと……しないで」

わけのわからないことを言っていた。

「は？ お前の身体じゃねえよ。これはもう、俺たちの身体だ」

キョウコは親切に目の前の男に事実を告げた。泣きながら勃起し続ける男の耳元でキョウコはさらに続ける。

「俺がその身体と会うのは、これで最後だからな。……いいぜ。その身体は俺にとつても一応愛着がある身体……だからなあ。最後にとびっきりのお土産をやるよ。優しいだろ、俺って」

キョウコはその男のペニスを手に取り、自分の膣に挿入した。激しく、搾るように、キョウコは倍以上歳の離れた男のペニスを啜え込んだ。

「ッ……あああつ、すつげえ……。腹の中でチンコが膨らむ。バイブとは全然ちげえ。ハッ、本物チンコは初めてだけど……いいもんだな。これからたつくさんのおまんこでおちんちんを食べてあげないと、な」

キョウコのおまんこの締まりに男は絶叫する。涙を流して喜ぶ。

オスとメスが混じり合う匂いは、マユミとキョウコが毎晩繰り広げるメス同士の交尾では起きない種類の匂いだった。

その匂いにマユミもクラクラとした。男と女の絡みなんて初めて見た。それが男女のセックスなのだとして初めて知った。それまで何度もキョウコお姉ちゃんとセックスはしたけど、それとはだいぶ違う。お股の奥がキュンキュンと鳴った。

「ほら、もつと腰を動かせよお！ その身体は童貞じゃあねえんだからよ、もつと上手くできんだろうが。気合い入れろ！ 腰を動かせ！ 俺の中をもつと突け。俺の——キョウコの膣内なを気持ちよくしてくれよ」

「あああ！ キョウコは私です！ 返してえ、私の身体をお……返してえ！」
「なに言ってるんだよ。お前が……あん、キョウコのわけ、ねえだろうが……。知らねえのかよ、塩乃木キョウコってのはな、女の子なんだよ。……あんあ！ お前はなんだ……？ ほら、股間にそんな汚ねえものを生やしてえ……ん、それを硬く勃起させて……あまつさえそれを濡れ濡れのおまんこに突っ込んで、今にも射精しそうに、ブサイクでだらしねえ顔晒してる中年の男だろうが……んッ……あああ。どこからどう見ても……『あたし』がお嬢様の塩乃木キョウコで『あなた』はどこの馬の骨とも知らない田中カズヒコなんだよ……！」

パチュ。パチュ。パチュ。

それは身分差のある二人の音。そこにはかけらも愛はないのかもしれないけど、それこそがキョウコの身体がずつと夢を見ていた愛の営みであるのは間違いなかった、

キョウコのお嬢さまおまんこがキュウウつと庶民チンコを抱きしめる。

「ヤダヤダヤダ……あああああ！」

男はついに射精した。溜まりに溜まった濃い精液だった。

ビュルルルル——。

卑しき身分の子種が、貴き身分のおまんこにぶちまけられる。

「ああ……ああ。たっぷり出しやがってえ。はは、これはキョウコの身体、妊娠しちまうかも知れねえなあ。まあ、でも、それもいいかな。俺の卵子と俺の精子だ」キョウコが男に優しく告げる。「ふふふ、キョウコがね、あなたとの赤ちゃん、産んであげるからねえ」

キョウコが男に笑いかけた。男の顔はもう涙でぐしょ濡れだった。

「うそお……こんなの……うそ」

「嘘じゃねえよ、ほら」キョウコがおまんこを広げる。中からどろりとした白濁色の汁が零れ落ちる。「たっぷり出しやがって」

精液が溢れるおまんこを凝視しながら、男は絶叫した。

そのペニスは年甲斐もなくまだ勃起していた。

「さて、お次は良い子の保健体育実践講座だ。見学だけじゃ、マユミちゃんが可哀想だもんな」

次いで、キョウコはマユミのおまんこも男に貸してあげた。そのおまんこはすでに何度もパイプを咥え込んで挿入には慣れ切ったおまんこだった。それでもマユミは初めての本物お

ちんちんセックスに喜んでいた。「おちんちん気持ちいい」と少年のような笑い方をした。

男は意味不明ながらも「先輩、先輩」と呟きながらマユミの膣内^{なか}で果てた。二度目なのにそれは絵の具のように真っ白な精液だった。

風の噂で、それからすぐにその男は自ら電車で飛び込んだらしい。

まあ、『入れ替わりパンデミック』後にはよくあった光景だ。

誰も対して気にしていなかった。

用語集①

入れ替わりパンデミック

：世界人口の約六割が巻き込まれた超常現象。同時多発的に肉体から精神が切り離されて、別の地点にある肉体に転移する。精神の『入れ替わり』と呼ばれる現象。

入れ替わり新法

：『入れ替わりパンデミック』後、緊急閣議決定により制定された。『パンデミック』以前から保有する名前や財産等は精神ではなく、肉体が保有する権利と定められた。「A」という名前を持つ肉体は『パンデミック』以降もその精神とは関係なく「A」と呼ぶこととなる。

渋谷高等女学園

：幼稚舎から大学までエスカレーター式の名門女子校の高等部。少人数の外部入学生もいるがほとんどは幼稚舎からの進学組。政治家や経済人の令嬢が多く通い、いわゆる『お嬢様学校』として世間に認知されている。